

スがありました。一クラス四十名程度で
部部はおろか長崎あたりからも来ていま
したよ。

洋裁に魅せられる

女はどこに嫁に行くかわからない、せ
めて機織りぐらいはというのが母の考え
でした。裁縫もきびしくしつけられ女学
校四年の時には二枚がさねを縫って卒業
時の展覧会に出品しました。

卒業後、二年程して結婚し、一児をも
うけましたが不幸になりましてね郷里に
帰りました。その後すぐ東京の九段の和
洋裁縫学校、現在の和洋女子大の前身に
なりますが、そこに入りました。卒業
後、兵庫県三田の公立実科高女につと
めました。けれども私にとって、そこで和
裁を教え、教職で一生を終ることはなん
とでもやりきれない気持ちでした。

それというのにも和裁は一重の断ち方に
しても二枚と四枚で六枚、袖が四枚とい
ったことできまわってしまっていてど
う扱えばどうなるかといったことがない
です。今は幾分研究されてきてはいます
がね。

教える立場から言っても決ったことを
教えればいいわけですから研究の余地が
あまりないんです。

それに比べると洋裁は違います。人間
の身体につける布一片が創意工夫でど
んなにも変化するので。

和裁では社会奉仕は少ない。洋裁に

一生をかけてみて自分を試してみたい
というのがこの道に入った動機ですね。

文化服装学院に入学

それで、尚綱高女の先輩で滝下先生と
いう方の紹介で文化裁縫女学校、今の文
化服装学院に入学したわけです。大正十
二年四月、二十三歳の頃です。

私の家にはそんな事は言えません。丁
度弟が農大にきていたのですから、内
職のかたわら弟の面倒をみるという表向
きの理由で両親の諒解をとりました。

その頃の文化服装学院は牛込にあっ
て、木造三階建て、もちろん今程立派で
はなく、みすぼらしいたたずまいでし
た。でもそこでの勉強はおもしろくてお
もしろくてしようがありませんでした。
頭を使わなくては全くものにならない
です。

当時、女性には丸まげを結っている人も
いましたし、殆んど着物を着て洋裁を勉
強したわけですね。

関東大地震に遭遇する

洋裁は大正十二年九月の大震災を機に
普及しはじめました。和服のために行動
が制約され、焼死者が多くてましたから
ね。

震災の日、私は尚綱校の先輩で高田さ
んという市ヶ谷の保証人の家にいまし
た。二階で和服のつくろいものをしてい
る時にぐらぐらときたんです。それは大

変なものでした。でも、今でも憶えてい
ますけど、私はゆれながら柵から落ちて
くる物を見ていました。保証人のおばさ
んが「早く出てこなくちゃ死んじゃう」
と叫ぶんですが階段がゆれているもんで
すから降りられないんです。地震が少し落
ち着くの待って階段へ火ばちを持って
降りていきました。案外と冷静だったん
ですね。市ヶ谷の下町は昼すぎには火の
海となっていました。

弟は幸い郷里に帰っていたんです。一
番困ったことは食糧です。何もないんで
すね。このまま他人の家にいるのも心苦
しいと思っていた時に、避難列車がでる
というものですから、中央線から名古屋
にて三日がかりで、熊本へ帰りつきま
した。

温かいと思ったことは、避難列車がつ
くと駅々でおにぎりのたき出しがあった
ことです。列車は身うごきもできないほ
ど一ぱいでした。

私は十月一杯合志にいました。学校は
焼けはしませんでしたけれども使用不能
のため新宿二丁目に移転を余儀なくされ
たんです。この移転に伴い私は東京に呼
び出されうけたわけですがその時の通知
で私が洋裁学校に行っていることが家には
れたんです。

馬小屋から生れた学院

翌十三年、六十名程だった学校に三百
名が入学したんです。私もこの年の三月

はれて文化服装学院の先生になりました。
た。

その年の七月度量衡改正がありまし
た。従来のくじら尺、金尺、洋服はイン
チだったのがメートルセンチに
変わったんです。これには困りましたね。

校長の並木伊三郎先生は埼玉の小学校
で代用教員をされてた方ですが裁縫の魅
力にとりつかれ代用教員の職を辞して赤
坂の飯島洋裁店で十八年間デッチ奉公を
した人です。いわゆる技術の人ですね。
学院にとってもう一人欠くことのできな
い人がいます。それは遠藤政次郎という
人で、この人はシンガミシンの販売を
やっていた人ですが、早くから洋裁の將
来に目をつけていた人です。この二人の
であいがある今日文化学院があるん
です。技術の人と経営の人とのあい
ですね。

二人の力で文化服装学院は、まず、炭
小屋を改造するところから始まりまし
た。キリストは馬小屋から生れたが
「文化服装学院は炭小屋から生れた」と
私は今でも生徒に話すんです。大正十年
の時です。

その後、震災、ろう電による焼失など
でなんべんか場所が変わりましたが、昭和
二年現在地のテニスコート付近に三百一
十八坪の土地を買って六教室を開設しまし
た。やっと自分たちの学校ができたので
す。その当時は二百人ぐらいの生徒でし
たので給料もやっとなりました。五年から八

年にかけて遠藤院長さんが仕事をやめて
学院経営一本にされたため生徒数も増
え、八年には五百人になりました。百人
増えたら給料一割増しというので毎年
一割づつ三年上げてもらいました。その
当時は苦しかったですね。ただ好きだっ
たからできたんです。

当時は今みたいに情報がありません。
現物もないんです。写真をみたりしなが
ら研究をしたんです。ペレー帽ひとつ
作るにしても数学から割り出すというよ
うな手間のかかることをやっていたん
です。

戦前の私たちの苦勞といたらそれは
大変なものでした。そういうことだもの
ですから、とても結婚なんて考えるひま
はありませんね。

異端者扱い

昭和十二年の盧溝橋事件勃発の頃か
ら、私たちの仕事にとって大変な時期が
きました。我々洋服を作る者は異端者扱
いです。ボタン付けにしても日本は男女
とも千二百年前から勅令でもって左衽が
上だというんです。

男はカーキ色でつめ衿、女は和服で袖
をきり、下はモンペになりました。

大東亜戦争で学校は陸軍と海軍とで奪
りあいをして、結局は陸軍の軍需工場にな
りました。二十年五月学校は空襲で焼け
ました。

戦後、学院は洋裁ブームに乗ってぐん
ぐん成長しました。二十五年短大併設、
三十年地上九階の円形校舎完成、そして

三十五年遠藤院長の死にともない、私は
第五代院長に就任、四十六年までやりま
した。

挨拶をしない学生たち

私は五十年程この仕事に就いています
が、昔と今の生徒は全く違いますね。変
わってきています。戦前二十年は殆んど
同じだったように思います。変わってきた
のは戦後三十年です。これも社会的に変
化の大きい時代ですからこれを反映した
ものでしょうね。

表面的なことですけども、最近の生
徒は挨拶をしませんね。廊下をすれちが
ってもやりません。教える者と教えられ
る者との間が冷めてるんですね。特に女
子生徒がそうですね。男子生徒はどこか
らでも挨拶をおくります。これは、中学
校、高校教育、家庭教育のひずみからき
ているんでしょうかね。

せめて子供服は母親が

最近、洋裁学校は既制服の影響で衰退
気味にあります。既制服はサイズ、デザ
イン、柄も豊富になってきています。注
文しなくても、物がそこにあるし、また
自分で縫う必要もないのですからね。
でもね、石油ショック以来、手づくり
の味というか、洋裁が見直されてきてい
ますよ。私は流行はともかくとして、縫
うという基礎的なことを覚えて欲しいと
思うんです。それだけでなくてはつくろいも
できません。

「そんなもの買っちゃえ」という男の

人にも責任はありますよ。せめて、子供
服ぐらいは縫って欲しいですね。親が子
に手作りの服を着せる、すばらしいこと
だと思いませんか、母と子の間に気持ち
の通い合いが生まれます。生きた家庭教育
ですね。家庭の中にあっても衣の部門は
大事な女の働き場ですよ。

ヨーロッパ所感

日本人は流行には大変にとつきが早
いでですね。ひとつはやれば皆同じです。
昭和二十九年から三十年にかけてフラ
ンスにいた時にヨーロッパ各地をまわり
ました。当時はドイツ、フランス、イタ
リーの服装ひとつにしても国民性とい
うものがはっきりしていました。その違い
は歴然としていましたね、でも今は世界
どこへ行っても変わりません。

私がいたころ、丁度イタリーでは映画
化された終着駅ができた頃ですが、すば
らしい駅がある一方においては、みすぼ
らしい住宅街の中を子供達が細い裸足で
歩いてるんです。為政者が民衆の生活
を考えていないんですね。

ドイツは駅にはえんがいがいないのに一
歩郊外にでると、それはすばらしいアパ
ートが建ち並んでいるんです。これをみ
た時、私はドイツはおっかない国だと感
じましたね。

フランスは服飾の面でも非常に質素な
国という印象を受けました。世界の服飾
界のトップをいく所ですが、それは産業
として成立しているんであってその国民
の一人一人がトップモードに身をつっ

でいるわけではないんですね。
生活にしても然りです。レタス、ニン
ジンにしても日本人なら捨てるようなと
ころまで食べるんです。ニンジンのヒゲ
一本でもスープにとるんですよ。

うれしい郷土の発展

熊本には二十七年から四十八年まで毎
年二回、尚綱短大の集中講義のため帰っ
ていました。それもとんぼがえりだもの
ですから熊本の变化というものがよく解
りません。合志にも時折り墓参りに帰
りますが、団地ができていますね。町はみ
な舗装です。そのためかどうかブロック
塀が殆んどしてあります。農家は暮らし
が良くなってきてるんですね、びっく
りますよ。

私は自分の仕事に熱中するあまりに郷
土熊本のことにはちょっととんでい
ないです。郷土愛はあるんですよ。郷土のために
できることならなんでもしたいというの
が私の本心です。生れ育った土地という
のは忘れようにも忘れることはできませ
ん。郷土の発展を見聞きすることはこの
上もなくうれしいものです。

熊本県の人を育てることを知らな
いといわれていますね。人の足を引っ張
るといわれます。私はこれが解りませ
ん、これが事実をうたえればやはり熊本
県の人を考へねばならないことだと思
います。

最後に熊本の自然これは大事にして欲
しいですね。高台からみた熊本の町はま
さに森の都の名に値するところですよ。